

新約聖書 ルカによる福音書 13章 10節—17節 (新共同訳)

¹⁰安息日に、イエスはある会堂で教えておられた。¹¹そこに、十八年間も病の霊に取りつかれている女がいた。腰が曲がったまま、どうしても伸ばすことができなかった。¹²イエスはその女を見て呼び寄せ、「婦人よ、病気は治った」と言って、¹³その上に手を置かれた。女は、たちどころに腰がまっすぐになり、神を賛美した。¹⁴ところが会堂長は、イエスが安息日に病人をいやされたことに腹を立て、群衆に言った。「働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらうがよい。安息日はいけない。」¹⁵しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。¹⁶この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか。」¹⁷こう言われると、反対者は皆恥じ入ったが、群衆はこぞって、イエスがなされた数々のすばらしい行いを見て喜んだ。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「束縛から解く」

スティーブン・スピルバーグ監督の『戦火の馬(せんかのうま)』という映画があります。共に暮らし、強い心の絆で結ばれていた主人公の少年と馬が、第一次世界大戦のさなかに離れ離れとなり、最後は再び会うことができたという物語です。

この少年と馬が再び出会うことができるまでには、他の人々との様々な関わりがありました。その際、登場する人物たちが、規則や決まりといった境界線を踏み越えていくことによって、結果的に少年と馬が生きて再会できたという印象を受けました。

本日の福音書は、十八年間も病の霊に取りつかれ腰が曲がったままだった女性を、安息日の決まりを破ってイエスがいやした箇所です。

「イエスはその女を見て」とあるように、この女性はイエスの眼差しの中に捉えられました(ルカ 13:12)。イエスとこの女性との出会いは、イエスが彼女を「見て呼び寄せ」たところから始まります(ルカ 13:12)。イエスはこの女性をご自分のもとに呼び寄せ、集まっていた人々の前で彼女と関わりを持ちます。「病の霊に取りつかれている」と見なされていた女性は、当時の価値観において、社会的に低い立場に置かれていました。そのような女性と、皆が見ている前で関わりを持ち、いやすことは、社会における彼女の立ち位置を回復するものでした。

イエスがしたことは、この女性に罪の悔い改めをするようにと求めることではありませんでした。イエスは、彼女の苦難がサタンに縛られた結果生じているものと見ていました(ルカ 13:16)。

イエスは、彼女に「婦人よ、病気は治った」と声をかけ、彼女の上に手を置きます（ルカ 13:12）。イエスは、多くの病気の人たちに手を置きましたが、手を置くことは祝福を表すものでもありました（ルカ 4:40、13:12-13）。女性が回復したしるしは即、現れました。彼女はまっすぐに立てるようになり、神を賛美します（ルカ 13:13）。賛美は、神の救いの力に対して私たち人間がお返しできる唯一のものです。

この「治った」（ギリシャ語のアポリュオー）の元の意味は、「解放されている」です（ルカ 13:12）。ここでのいやしは、「病の霊」の束縛からの解放でした（ルカ 13:11-12）。この女性は、病の霊による束縛と支配からイエスによって解き放たれて、神の恵みの支配下に移し変えられたのです。

しかし、この出来事が起こった場所である会堂の長（おさ）は、イエスが安息日に病人をいやしたことに腹を立てます。この時代のユダヤにおいて、安息日を尊守すること、すなわち安息日に仕事をせず、休息と礼拝に集中することは、宗教的・社会的なアイデンティティ維持のために特に重要視されていました。会堂長は、女性をいやしたイエスの行為を、安息日の決まりを破ることだと腹を立てたのです。

そして会堂長は、安息日に病人をいやしたイエスを非難する言葉を、イエス本人にというよりも、そこにいる群衆に向かって言いました（ルカ 13:14）。イエスを人々の前で裁き、見せしめにした気持ちがあったのでしょうか。

会堂長は、女性が十八年間にもおよぶ苦しみから解放された喜びよりも、イエスが安息日の決まりを破ったことを重視します。

イエスは、そんな会堂長に「偽善者たちよ」と言い、この女性のことを「アブラハムの娘」と最上の誉め言葉で呼びます（ルカ 13:16）。イエスは、安息日であっても、同じ神の民である「アブラハムの娘」が十八年間も病で苦しんでいたのならば、今すぐにでも病の霊の束縛から「解いて」あげるべきだと告げました（ルカ 13:16）。

会堂長は、イエスが安息日を蔑ろにしていると非難しました。ですが、十八年間も病に苦しんできた女性が救われるのは今日ではなくて明日でも良いという会堂長の考え方は、命ある人間を蔑ろにしていると言えるでしょう。

安息日とは、神が定めた救いの日であり、恵みを喜ぶ日です。互いを見張り、裁き合って生きるのではなく、愛し合って生きることが神の御心だとイエスは伝えたかったのだと思います。

フランスの修道女のリジューのテレーズはこう述べています。「天国には、もう時間がないのですから、／イエスさまにとって『時』は問題ではありません。／ごらんになるのは、愛だけです」（『リジューのテレーズ 365 の言葉』127 ページ）。

規則や決まり事を重視した結果、愛からかけ離れた事態となってしまうことは、現代においても多くあると思います。

先ほどお話しした『戦火の馬』という物語で、主人公の少年が可愛がっていた馬は、少年から引き離され、ドイツ軍で働かされます。ところで軍には、あどけなさの残る二人の兄弟の兵士がいました。「帰ってきて欲しい」という彼らの母親の願いを叶えようと、二人の兵士はその馬に乗って脱走し、ある農家に逃げ込みます。

しかし逃げた二人は、追っ手に捕まり、脱走した罪に問われて射殺されてしまいます。

戦争という状況の中、「規則だから」という理由で、ただ母親に会いたい一心だった若き少年たちに行われたこのような制裁は、本当に痛ましく、愛からかけ離れたことだと思います。

そして、「法」や「規則」の拘束力が強い人間社会においては、その時代背景などによっても、当然のようにこのようなことが行われてしまう側面があります。

しかし私たち人間が、肉体の死を迎え、この地上での生を終える時、この人生において神が大切にされていたものは、ただ愛だけだったと気付かされるのではないのでしょうか。

物語の中の兄弟二人は、軍の規則を破った末に処刑されましたが、兄弟が一緒に連れ出した馬は農家の人に助けられ、様々な出来事を経たのちに、主人公の少年と再会することができました。殺された本人たちや、愛する二人の息子を亡くした母親の全くあずかり知らぬことでも、兄弟の不条理な死は、完全に無駄になったわけではなかったのだと思います。

人類の歴史には、多くの犠牲と悲しみがあり、それは現在の世の中においてもそうだと思います。

しかし私たち人間が、どんなに不条理と思える状況の中にいる時も、主イエス・キリストがごらんになるのは私たちの愛であることを覚えながら、私たちは希望と喜びをもって共に歩んでいきましょう。

お祈りをいたします。

天の父なる神様。いつも私たちをあなたの愛のうちに導いてくださり、ありがとうございます。あなたが解き放ってくださる自由の喜びと共に、この自由を、隣人の喜びのために用いさせてください。御子 主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 イザヤ書 58章9節b—14節（新共同訳）

⁹ 軛を負わすこと、指をさすこと／呪いの言葉をはくことを／あなたの中から取り去るなら／¹⁰ 飢えている人に心を配り／苦しめられている人の願いを満たすなら／あなたの光は、闇の中に輝き出で／あなたを包む闇は、真昼のようになる。¹¹ 主は常にあなたを導き／焼けつく地でああなたの渴きをいやし／骨に力を与えてくださる。あなたは潤された園、水の涸れない泉となる。¹² 人々はあなたの古い廃虚を築き直し／あなたは代々の礎を据え直す。人はあなたを「城壁の破れを直す者」と呼び／「道を直して、人を再び住まわせる者」と呼ぶ。¹³ 安息日に歩き回ることをやめ／わたしの聖なる日にしたい事をするのをやめ／安息日を喜びの日と呼び／主の聖日を尊ぶべき日と呼び／これを尊び、旅をするのをやめ／したいことをし続けず、取り引きを慎むなら¹⁴ そのとき、あなたは主を喜びとする。わたしはあなたに地の聖なる高台を支配させ／父祖ヤコブの嗣業を享受させる。主の口がこう宣言される。

新約聖書 ヘブライ人への手紙 12章18節—29節（新共同訳）

¹⁸⁻¹⁹ あなたがたは手で触れることができるものや、燃える火、黒雲、暗闇、暴風、ラッパの音、更に、聞いた人々がこれ以上語ってもらいたくないと願ったような言葉の声に、近づいたのではありません。²⁰ 彼らは、「たとえ獣でも、山に触れば、石を投げつけて殺さなければならぬ」という命令に耐えられなかったのです。²¹ また、その様子があまりにも恐ろしいものだったので、モーセすら、「わたしはおびえ、震えている」と言ったほどです。²² しかし、あなたがたが近づいたのは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり、²³ 天に登録されている長子たちの集会、すべての人の審判者である神、完全なものとされた正しい人たちの霊、²⁴ 新しい契約の仲介者イエス、そして、アベルの血よりも立派に語る注がれた血です。

²⁵ あなたがたは、語っている方を拒むことのないように気をつけなさい。もし、地上で神の御旨を告げる人を拒む者たちが、罰を逃れられなかったとするなら、天から御旨を告げる方に背を向けるわたしたちは、なおさらそうではありませんか。²⁶ あのかきは、その御声が地を揺り動かしましたが、今は次のように約束しておられます。「わたしはもう一度、地だけではなく天をも揺り動かそう。」²⁷ この「もう一度」は、揺り動かされないものが存続するために、揺り動かされるものが、造られたものとして取り除かれることを示しています。²⁸ このように、わたしたちは揺り動かされることのない御国を受けているのですから、感謝しよう。感謝の念をもって、恐れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えていこう。²⁹ 実に、わたしたちの神は、焼き尽くす火です。

教会讃美歌 239番「ひととなりたる」、238番「いのちのかて」、250番「つくられしものよ」、298番「心まよいゆくをやめて」